

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## マヤ興亡：文明の盛衰は何を語るか？

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5663">http://hdl.handle.net/10502/5663</a>

第二章 過去への糸口

マヤ文明の栄えた地は、メキシコのユカタン半島のキンタナ・ロー州、ユカタン州、カンペチエ州、さらにタバスコ州とチアパス州の東部、グアテマラとベリーズ全域、それにサルバドールとホンジュラスの西部である。南北約八五〇キロ、東西約五五〇キロで、面積は三二万平方キロとも三五万平方キロともいわれ、ほぼ日本の面積と同じである。

メソアメリカ全体からマヤ文明をみると、面積が日本と同程度であるばかりか、文明も日本とよく似ていることに気づく。日本とよく似た文明が発生したといったら言いすぎになるかもしれないが、文明の体質とでもいえるものがよく似ていることが明らかになってくるのである。

### メソアメリカ

メソアメリカには、オルメカやサポテカなどの文明が栄えたが、メソアメリカとは、征服期にみられた文化特徴をもとに定義された文化領域である。およそ、メキシコの南半分とグアテマラ、ベリーズ、それにサルバドールとホンジュラスの一部を含んだ地域を指す。ここには、二六〇日曆と三六五日曆、点や棒で数を表わす表記法、二十進法、球戯、人身御供、周期的な市場、階段状のピラミッドなど、多くの特徴を共有した文明が興亡した。古くは、タバスコ州

## 第二章 過去への糸口

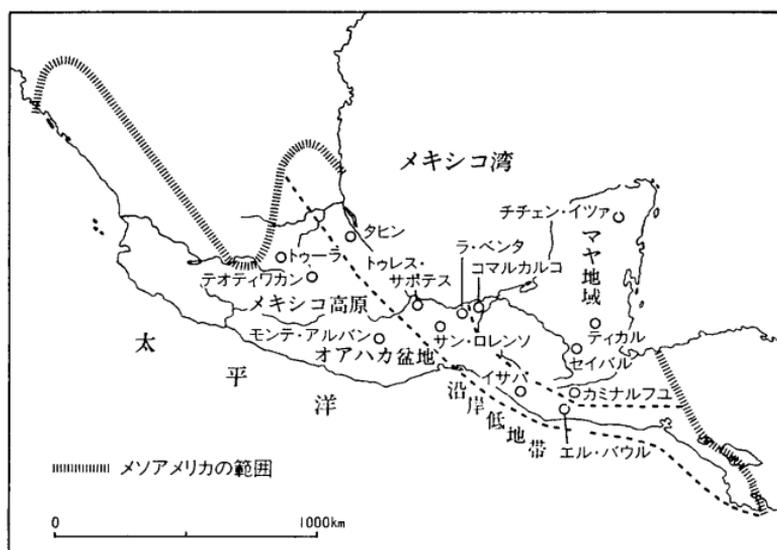


図2 メソアメリカ

からベラクルス州の沿岸地帯で栄えたオルメカ文明から、コルテスに滅ぼされたアステカ文明まで、数々の文明が花開いては散っていった。

マヤ文明が置かれた位置は、メソアメリカの東の端にあるが、その西には、オルメカとかテオティワカンとか、サポテカといった高文明が栄えていた。日本もその西には中国文明を筆頭にする高文明があった。日本が置かれた位置とよく似ているためか、文明の体質とでもいえるものがよく似ているのである。すなわち、日本の歴史を振り返れば、西の高文明の影響を受けて、それを自分に合うように変えて発展させてきたことをだれしも認めざるをえないが、それと同じようなメカニズムをマヤ文明にみることができるのである。たとえばマヤ文明の特徴のひとつと考えられるマヤ文字でさえ、西からの影響のもとに発達させたものであり、独自に創

造したものではない。ほとんどすべてが、西からの影響のもとに発達しているのであり、マヤで独自に作り出したものを探するのが困難なほどである。一度何かを取り入れると、それを自分たちに合うように変えて、発展させていく。それは、日本人の独創性の欠如、模倣し、よりよく改善していく性格とよく似ている。

それゆえ、メソアメリカの諸文明を抜きにして、マヤ文明は語れない。しかし、ここでは詳しく述べる余裕はないので、メソアメリカの諸文明については、ごく簡単に触れるだけにしたい。

メソアメリカ最初の文明はオルメカ文明で、紀元前十二世紀頃から前九〇〇年頃までサン・ロレンソで、つづいて前四〇〇年頃までラ・ベントを中心し、さらにトレス・サポテスに移り紀元前後まで、石彫や工芸に優れた文明がおこった。この伝統は、テワンテペック地峡を伝い、グアテマラの太平洋岸のイサパ文明に流れ、やがて、マヤ文明に受け継がれる。

高地では、メキシコ市周辺に巨大な都市テオティワカンが紀元前後に出現した。それは四世紀から五世紀にかけてマヤに影響を与えたばかりか、メソアメリカのほぼ全体に影響を与えた。しかし七〇〇年頃に崩壊してしまった。その後、チョルーラやシヨチカルコ、マヤ的な壁画の出土で有名になったカカシユトラなどの都市が栄えたあと、九〇〇年頃よりトゥーラを中心にトルテカ文明が栄えた。これもマヤに影響を与えており、ユカタンのチチエン・イツアにトゥーラとよく似た構造物や石彫類を見いだすことができる。トルテカは一二〇〇年頃滅んだが、

メキシコ盆地は主権争いのあと、アステカ文明が栄えることになる。

メキシコ市から南約五〇〇キロのところにあるオアハカ盆地では、紀元前五〇〇年頃より、文字が記され始める。モンテ・アルバンを中心に栄えたその文明を、サポテカ文明と称している。九〇〇年頃に滅んだあとは、ミシュテカという名で呼ばれるようになるが、それはアステカに巨大なる影響を与えた。

#### 自然環境

マヤ文明は日本文明とよく似ているところがあると、さきに指摘した。しかし、それが展開した自然環境は、日本とはまったく異なる。

マヤ地域は北緯一五度から二二度の間にはいり、熱帯雨林気候といえる。しかし、地形や環境の違いから、変化に富んだ地域となっている。

この地域は、高地と低地北部、低地南部の三つに大きく分けることができる。しかし、図3のように、低地南部を中央部と南部に分ける場合や、さらに細かく分けて、中央部、パシオン地域、ウスマシタ地域、南東部、北西部、南西部と分ける場合がある。また低地北部も、細かく分けて、北平原部、東海岸部、ブウク地域、チェネス地域、リオベック地域、カンペチェ地域と分けることも可能である。

マヤ地域の一年は、乾季と雨季に分けられる。だいたい五月か六月から雨季が始まり、十一

月か十二月ころまで続く。年間降雨量は北から南にいくにしたがつてふえ、北端で約五〇〇ミリ、中央部で一〇〇〇〜一五〇〇ミリ、南端のグアテマラ高地のふもとでは三〇〇〇ミリにも達する。

マヤ文明がもつとも栄えたのは、グアテマラのペテン県を中心とする低地南部である。低地は、年間平均気温が二五度C以上で、一年を通じてあまり変わりはない。しかし暑いときには四〇度ほどになるし、湿度も八〇%をこえる。ジャングルというと、多量の雨、高い気温、高い湿度から、非常に暮らしにくいところという印象をもちやすい。そのうえ、現在はほとんど人が住んでいないので、どうしてそんなところに、マヤ文明が栄えたのか、不思議に思える。だが実際にそこに入ってみると、それほどでもない。確かに暑いし、湿気が多いし、ところによると、雲霞の如く蚊がつきまとう。だが暑いのは昼間だけで、その暑い昼間でも、木陰では結構涼しいし、朝夕は冷え込む。蚊さえいなければ、全然住みにくい気がしない。マリアアとか熱帯特有の恐ろしい風土病があるが、グアテマラのペテン県の中央部にあるペテン・イツア湖岸にあるフロレスなど、楽園のようである。ティカルなどのよく整備されている遺跡も、快適である。とはいえ、住みやすいのは、手入れのよく行き届いたところだけで、そうでないと、やはり条件の悪いところが多い。しかしマヤ文明が栄えていた頃は、十分開発されていたはずで、そうだとすると、それほど困りはしなかったにちがいない。

低地南部は、空からみると、緑の平地のようにみえる。しかし実際には、起伏に富んでおり、



図3 マヤの地域区分と遺跡

数メートル先はもう見通しがきかないほど、うっそうと木が生い茂るジャングル地帯である。そうしたジャングルも、限りなく存在するマヤの遺跡からみて、原生林はほとんどなく、都市が見捨てられて以後、形成されたものとみられる。ほとんど一度は人間が切り開いたあとに生長したものと考えられるのである。

低地はジャングル地帯だといったが、ところが最近の開発で、ジャングルはどんどん姿を消しており、ペテン北部に残るのみとなってきた。

ペテンの中心部にあるティカルは、ペンシルベニア大学により調査がされた、マヤ文明の中心となる大遺跡である。現在では、その周辺も含め、国立公園となつて、開発をまぬがれている。中心部には、幾つかの遺跡群があり、それらをつなぐ道がある。よく整備されているが、そこでさえ、人々が訪れることの少ない遺跡群に行くと、うっそうと生い茂る木々のため、道に迷いそうになる。周囲には木しか見えないから、この道でいいのかと不安になつてくるのである。いちばんよく整備されているティカルでさえ、周囲の見通しがきかないほどであるから、これが、人が訪れることの少ない、アグアテカとかドス・ピラスなどの遺跡であると、ガイドなしには我々は歩くことができない。それほど木々に覆いつくされている地域である。

一九八九年の五月、私は、ウスマシタ川とパシオン川の合流地にあるアルタル・デ・サクリフィシオスを訪れる機会を得た。ここは一九五八年から一九六三年にかけて、ハーバード大学のピーボディ博物館による発掘調査が行なわれた。それから二十六年たつて訪れた遺跡は、

ふたたびうつそうと木々が生い茂り、なにも見渡せない状態に返っていた。ジャングルの再生力の強さを思い知らされたのであるが、同時になぜこんな所に文明が築かれたのか、あらためて疑問を感じた。しかしその疑問に対して、ふと次のような思いがわいてきた。当時も現在と同じような条件であれば、切り開いた土地は、あつという間に木々で覆われたはずである。この地のもつその生命力の強さがマヤ人を引きつけたのではないだろうか。

低地マヤと非マヤ地域の境近くには、大きな川が流れている。西にはウスマシタ、グリハルバというたくさんの支流をもつ大河川があり、南東にはモタグア川が流れている。いずれも高地にその源を発し、高地と低地、非マヤ地域との交流路として機能していた。北東では、ベリーズとメキシコの国境を画するオンド川、その南にはベリーズ川がある。これらの川は、水資源として、魚などの蛋白源として、さらには、海と内陸を結ぶ重要な交易路として、機能していた。

低地マヤのほぼ中央部には、湖が点在している。東から西に、サクナブ湖、ヤシユハ湖、ペテン・イツア湖、サクプイ湖、ベルディダ湖と名を挙げることができるが、そうした大きな湖の間にも、いくつか小さな湖がある。だが水資源として大事な湖や河川流域からはなれたところ、ティカルやワシヤクトゥンなどの大遺跡が存在しており、不思議な文明をより不思議にしてきた。低地マヤは、石灰岩の地質のため、水の問題が絶えずつきまとったと想像されるが、ティカルでは水の通りにくい粘土で底を覆った貯水池が発見されている。広場の雨水をそこに

流す水路も見つかっており、水資源の問題をマヤ人は土木的に解決していたのである。

これらの地域の最大の水資源は、バホという季節的に水のたまる湿地やアグアダと呼ばれる池である。現在は乾燥して、ジャングルとなっているところでも、低いところは、雨季には水がたまる湿地帯であったようで、だいぶ現在とは、景観が異なっていたと思われる。よく見ると、遺跡は、そうした低地帯を避けて、みな高台に建てられている。現在の景観からは想像し難いが、その当時、これらは池や湖であったという意見もある。そうでなくても、盛り土灌漑農業には絶好の地形であったことはまちがいない。焼畑農業ではとうてい支えきれない多くの人口がいたことが住居址の研究から判明したが、そうした集約農業を営んでいたからだということがわかってきた。

気候は北に行くにしたがい乾燥するため、北部は、低いいばらの生い茂る灌木地帯とかわる。南にある川や湖がなくなり、わずかにセノータと呼ばれる自然の井戸しかなくなる。低地北部の西側には、プウクと呼ばれる低い山脈が南北にはしっている。この一帯は、プウク様式といわれる美しい建築様式が栄えたところで、その代表的な遺跡であるウシユマルやカバーなどは、現在は有名な観光地となっている。ユカタン一帯には、マヤ人と自ら呼んでいる、ユカテク・マヤ人が七〇万人ほど住んでいる。

南の高地は、大部分が火山性の山で、四〇〇〇メートルを越す山々もそびえている。一〇〇〇メートルから二〇〇〇メートルくらいの高さは、ちょうど常春の気候で、マヤ人のうちでも

高地マヤ人に分類される、キチュエとかマムとかケクチとかいわれる人々が、約二〇〇万人ほどのこの高地に住んでいる。

高地中ほどに位置するグアテマラ市には、カミナルフユという遺跡がある。ここはマヤ文明に多大な影響を与えたところとして知られている。そのほか高地にもたくさん遺跡が点在しているが、マヤ文明という見地からみれば、ここは周辺地域である。だが、黒曜石や蛇紋岩、翡翠などの鉱物資源が豊富であり、低地との交流がいやが上にも持たれた地域で、マヤ文明を理解するためには欠かすことのできない地域である。

マヤのほとんどの遺跡は、低地の暑い地帯に分布しているが、地域区分で南西地域と南東地域にはいる、たとえばトナヤコパンなどでは、一〇〇〇メートル前後の高さのほどよい気候のところにある。これらは地理学からは一部高地に属するであろうが、ふつう高地マヤとはみなしていない。

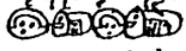
さらに南は、グアテマラの太平洋岸の低地帯となる。ここはマヤ文明が栄える前に、高い文化が広がっていた地帯である。オルメカ文明が栄えたベラクルス州南部からタバスコ州にかけての低地帯と、テワンテペック地峡でつながっており、北と南をつなぐ交流路として機能していた。

## マヤ文明である証明はいかに

マヤ文明が栄えた地域には、原住民としては、現在マヤ人が住んでいる。しかし、マヤ文明が栄えた最盛期から、すでに一三〇〇年あまり経っている。そのころも同じような状態であったのだろうか。グアテマラの高地と北のユカタンには、マヤ人と称する人がたくさんいる。しかし、もっとも栄えた低地南部には、現在ほとんどマヤ人はいない。マヤ人の分布と遺跡の分布は、ほぼ一致するけれども、肝心の低地南部には、マヤ人はほとんど住んでいない。そうすると、マヤ文明というけど、本当にマヤ人がこしらえたものなのか、気に掛かってくる。

マヤ人の分布と遺跡の分布はほぼ一致する。それに十六世紀以後に残された文献からも、少なくともその数世紀前から、そこにマヤ人がいたことは確かである。文化の連続性からみて、それ以前の文明もマヤ人の手になることはほぼまちがいない。だが、それだけでは証明できるとはいえない。マヤ文明がマヤ人の手になるものであることを証明するためには、もっとほかの面から探る必要がある。幸いなことに、マヤ文明にはマヤ人がこしらえたといえる直接の証拠がある。それはいうまでもなく文字である。その文字がマヤ語で書かれていれば、マヤ文明がマヤ人の手になることに、疑いをはさむ余地はなくなるからである。

十六世紀の中葉、スペイン人神父デイエゴ・デ・ランダは『ユカタン事物記』という書物を残した。その書物には、ユカタンに住むマヤ人の風習や彼らの伝える歴史のほかに、ユカタンの自然や征服史なども書かれており、その当時を知る第一級の文献となっている。マヤ文明の

ellos con tres juntiendo a la aspiracion de la f y la vocales, que antes de si seales, y en esto no fueran amig, osase el si quisieren ellos de su curiosidad. Exemplo.  despues al cabo le pegau la parte junta. Ha. que quiere decir agna porq la baeb tiene a. h. ante de si lo ponen ellos al principio con a. y al cabo desta manera  Tambie lo escriuen a partes, <sup>para</sup> de la vie y otra ma  Meray, no putiera aqui ni traba dello sino pa dar cuenta entera de las cosas desta gente. Mm hah que quiere decir no quiero, ellos lo escriuen a partes desta manera    

Signese en a, b, c.                                                                                                                                                                      

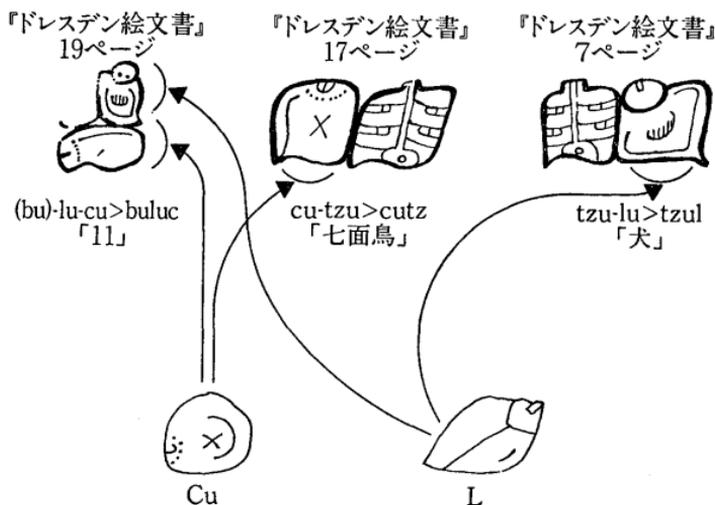


図5 「ランダのアルファベット」を利用した解説例

ユカテク・マヤ語で、それらはそれぞれ、ブルック (buluc)、クッツ (cutz)、ツル (tzu) という。文字を構成する文字素が、それぞれ音節文字であると仮定すると、「11」を表わす文字は、 $\times$ —lu—cuとなり、「11」はbulucであるので、消えているところには、buを表わす文字素があったとみることができる。閉音節語を開音節の文字で表わしたとみられるのである。「七面鳥」を表わす文字は $\times$ —lu、「犬」を表わす文字はtzu—luであると、ユカテク語の読みと意味を満足させることができる。cuとluはランダが記していた文字であるので、問題ない。それまで音価が不明であった文字素を $\times$ と $l$ という音価をもつ文字素であるとする、矛盾しなくなる。このように、いわば芋づる式に、文字素の音価が、少しずつではあるが、わかってきたのである。

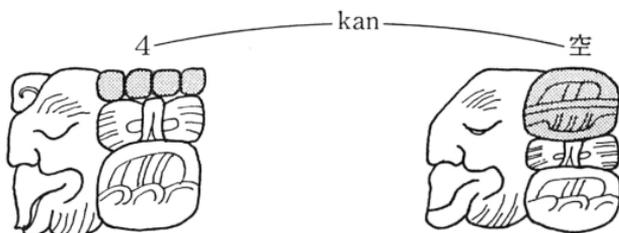


図6 異なる文字を音の一致によって交替させた例  
(パレンケ「14号神殿」のしっくい製文字より)

さきのは十一、二世紀以後の作とされる絵文書であったが、図6は、古典期の最盛期のパレンケからの例である。二つの文字は生起する場所の分析から同価であることが確かめられた。二つの文字の違いは、右上の文字素だけである。右の例は、これまで「空」を表わす文字とされてきたものである。左の例では、それは丸が四つに置き換わっている。すなわち数字の「四」である。現代ユカテク語では、「空」は *caan*['ka'an]、  
「四」は *can*['kan] である。すなわち同似音異義語であり、音の似通いから交替したとすると、この交替はうまく説明できる。これは、仮借の例といえる。この交替は、マヤ諸語でしかみられないものであり、文字がマヤ語をもとにしていることがわかる。

図7の最初は、二六〇日曆のカーバンという日の文字である。二番目は、マドリッド絵文書の蜜蜂が登場する章に出てくる。三、四番目はパレンケ遺跡から見つかった例であり、同価の文字の交替した例である。  
*cab*['kab] という語には、「大地、世界」という意味と「蜂蜜、蜜蜂」という意味がある。3、4の例の文字の正確な意味はまだよくわからないが、誕生に相当する意味をもつようで、ここに生起する *cab* は、「大地、世界」の意味をもっているようである。四の文字は、*cab* を表わす文字



1. 日「カーバン」



2. 蜜蜂・蜂蜜  
(『マドリッド絵文書』105ページ)



3. パレンケ  
「葉の十字の神殿」



4. パレンケ  
「十字の神殿」

図7 同じ文字を異なる意味に使用した例

素が二つに分けて書かれている。上はランダのアルファベット ca = [ka] である。すると下は ba ということになり、表語文字を音節文字で書き直した例とみることができる。もっと平たくいえば、漢字を仮名で書いたものである。

たった三つの例しか挙げなかったが、こんな例がたくさん見つかっている。これらの例から、文字は、ユカテク語に近いマヤ語で書かれていることがわかるであろう。すなわちマヤ文明と、いっている文明は、確かにマヤ人の手になるものであり、文字は、マヤ語で書かれたマヤ文字なのである。

マヤ文明を理解する鍵の一つを言語が提供していることを、文字の読みから示してみた。ランダはユカテク語を記していた。絵文書ばかりか、古典期の碑文の文字のいくつかもユカテク語で読むことができた。ではユカテク語だけで、

マヤ文字は読めるのであろうか。長い間に言語は変化する。ユカテク語では消失してしまつたが、そのほかのマヤのことに残されたものもある。たとえば、ランダの残した暦の読み方と文字の構成はかならずしも一致せず、ユカテク語では説明できないものもあるが、この不一致など、ユカテク語以外の言語をみないと、説明できないものである。つまり解説はユカテク語を中心において進めていけばいいのであるが、それだけでは駄目で、その他のマヤの言語も知らなければならないのである。

### マヤ諸語

表1は、マヤ諸語の分類に、各言語の人口を加えたものである。ふつう言語の分類は、単語を比較して行なうが、この分類は、単語の比較に加え、文法構造の比較をして、行なつたものである。人口は、メキシコにある言語は、一九八〇年の国勢調査によるもので、グアテマラは一九六四年の国勢調査を基礎に、その語の言語調査による人口推定の最大数を採っている。人口は一部の言語を除き、増えているからである。この人口は言語学的な調査の際に推計された数である。ところが国勢調査によると、グアテマラの人口は九〇〇万人を越え、そのうちの六〇%がインディオ、すなわち、マヤ人というのであるから、ゆうに五〇〇万人を越えることになる。

マヤ諸語は、マヤの地から遠くはなれたワステク語と、低地マヤと高地マヤの三つに大きく

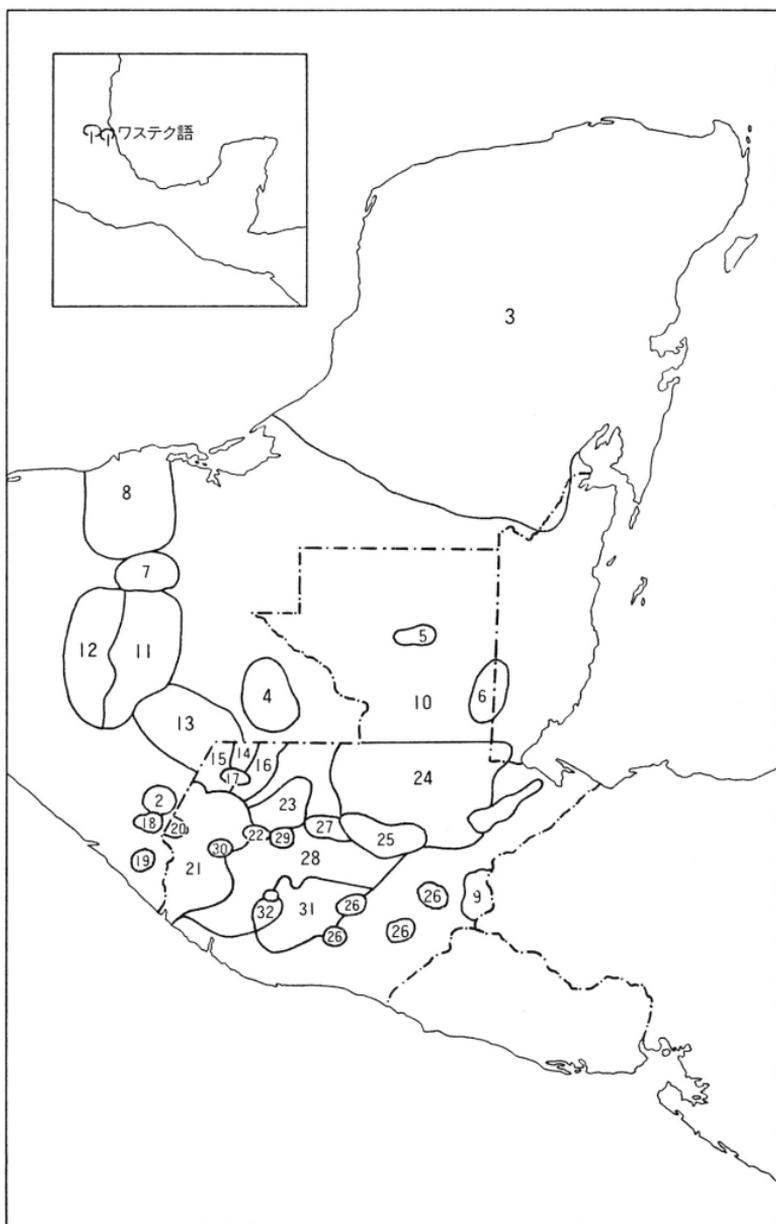


図8 マヤ語族の分布

第二章 過去への糸口

		言語名	分布記号	人口(人)	
低 地 マ ヤ	ワステク語群	1.ワステク語 Huastec	[ 1 ]	103,800	
		2.*チコムセルテク語 *Chicomuceltec	[ 2 ]	0	
	北語群	1.ユカテク・グループ° Yucatecan			
		a.ユカテク語 Yucatec	[ 3 ]	665,400	
		b.ラカンドン語 Lacandón	[ 4 ]	300	
		c.イツァ語 Itzá	[ 5 ]	500	
		d.モパン語 Mopán	[ 6 ]	8,000	
		南語群	1.チョル・グループ° Cholan		
	a.チョル語 Chol		[ 7 ]	96,800	
	b.チョンタル語 Chontal		[ 8 ]	29,000	
	c.チョルテイ語 Chortí		[ 9 ]	33,000	
	d.*チョルテイ語 *Choltí		[10]	0	
	2.ツェルタル・グループ° Tzeltalan				
a.ツェルタル語 Tzeltal	[11]		215,200		
b.ツォツィル語 Tzotzil	[12]	133,400			
c.トホラ・シル語 Tojolabal(Chaneabal)	[13]	22,400			
高 地 マ ヤ	西語群	1.カンホ・シル・グループ° Kanjobalan			
		a.チュフ語 Chuj	[14]	21,000	
		b.ハカルテク語 Jacaltec	[15]	27,000	
		カンホバル語 Kanjobal(Solomec)	[16]	43,000	
		アカテク語 Acatec	[17]	18,000	
		c.モトシントレク語 Motozintlec(Mochó)	[18]	600	
		トウサンテク語 Tuzantec	[19]	?	
		2.マム・グループ° Mamean			
		a.テクティテク語 Tectitec(Teco)	[20]	1,000	
	マム語 Mam	[21]	439,000		
	b.アグアカテク語 Aguacatec	[22]	15,000		
	3.イシル語 Ixil	[23]	46,000		
	東語群	1.ケクチ語 Kekchí	[24]	300,000	
2.ポコム・グループ° Pocom					
a.ポコムチ語 Pocomchí		[25]	61,000		
b.ポコムマ語 Pocomam		[26]	42,000		
3.キチエ・グループ° Quichean					
a.ウスパンテク語 Uspantec		[27]	1,600		
b.キチエ語 Quiché	[28]	500,000			
サカブルテク語 Sacapultec	[29]	3,000			
シパカパ語 Sipacapa-	[30]	3,000			
カクチケル語 Cakchiquel	[31]	400,000			
ツトゥヒル語 Tzutujil	[32]	50,000			

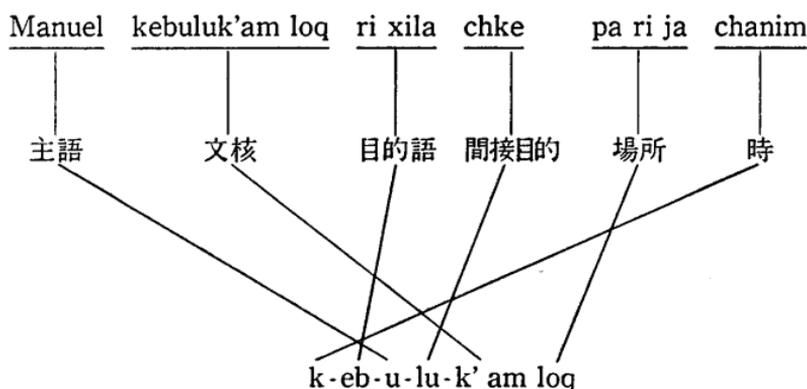
(分布記号は、図8の地図と対応する。)

表1 マヤ語族

分けることができる。ワステク語と一番近い言語にチコムセルテク語がある。その言語は現在は消滅しているが、マヤ地域で話されていた。ここから、マヤ祖語の源郷は、チコムセルテク語が話されていたあたりにあったと推定する人がいるが、これは言語学的には証明できない。しかし、ワステク語の分離は、たとえば、ケツアルコアトル（羽毛の蛇）の伝承に代表される民族移動の問題を考えるうえで、たいへんおもしろい例を提供している。（二二三―六頁参照）

低地マヤと高地マヤはそれぞれ二つに分けることができる。低地マヤは北と南に分けられ、北はユカテク、ラカンドン、モパン、イツァとなる。これらは、方言と呼んでよいほど、近い関係にある。大きな違いは母音の数であり、ラカンドン、モパン、イツァは六母音体系であるが、ユカテクは五母音である。低地南諸語は、さらにチヨル・グループとツエルタル・グループに分けられる。その違いは、語レベルは少ないが、文レベル（文核）では大きい。これら低地マヤ諸語が、古典期マヤ文明の言語とみられるが、ツエルタル・グループはだいたいぶその他と異なり、中心となるのは、ユカテク・グループで、それにチヨル・グループを加えたものと限定したほうがよい。もちろん、ツエルタル・グループを排除してしまえというのではない。それらも参考にすることを心掛けねばならない。

高地マヤは西と東に細分できる。西語群のうち、マム・グループは、もつとも変化が大きく、マヤ諸語でも変わり種となっている。東の諸言語は、十六世紀以後の文献で重要な『ポポル・ウフ』や『カクチケル年代記』などを残した、キチエ語やカクチケル語のキチエ・グループと、



「マヌエルはいますぐ彼らのために椅子を家のなかへもってくる」(キチエ語)

表2 抱合語の構造

ケクチやポコン・グループにさらに分けることができるが、違いはそれほど大きくない。

マヤ諸語は、抱合言語といわれるものに入る。これは、主語や目的語などになる語をもう一度接辞を使って言い直すところに特徴がある。すなわち動詞に主語や目的語や時相などを表わす接辞をつけて、それをあたかも一語のように発音するところから、つけられた名前である。例文で文核と名づけたところは、全体の文を接辞を使ってもう一度言い直している。それゆえ、文核は一文に相当する。実際、この文核部だけで、立派な文となる。これは見方を変え、表現の重複とみることができるが、この重複性は、たとえば、名詞と名詞の修飾関係を表わす場合などにも表われており、一つの特徴となっている。これはその他の中米諸言語にもよくみられる特徴である。

- V[svo]OS : ユカテク、モパン、イツア、ラカンドン、チョル、ツオツイル、  
トホラバル
- V[osv]OS : ケクチ、ポコムチ、キチェ、ツトウヒル
- V[osvo]OS : ウイスタン・ツオツイル
- SV[svo]O : チョントル、チョルティ
- V[osv]SO : ハカルテク、マム、アグアカテク
- V[svo]SO : イシル
- V[osv]OS/V[osv]SO : ワステク
- V[svo]OS/V[svo]SO : テネハバ・ツェルタル

表3 文核内と文核外の主語、目的語、動詞の分布

例文を記したアルファベットには、アポストロフイがついているものがあるが、それは声門閉鎖音を表わす。この声門を閉鎖して発音する音は、マヤ諸語の大きな特徴である。日本語では清音と濁音の対立があるように、マヤ諸語では、声門閉鎖音と非声門閉鎖音——声門を閉鎖せずに発音する普通の音——とが対立する。

高地マヤ諸語では、喉の奥で発音するqとその声門閉鎖音であるq'があるが、これは低地マヤ諸語にはみられない。それに当たる音は、k、k'に変化している。その違いが、単語レベルで、マヤ諸語を低地と高地に分ける大きな指標となっている。ツェルタル・グループは、現在チアパス高地に住んでいるが、q、q'をもっていないので、この指標からは低地に入れる必要がある言語群である。

文核内の各要素の分布は、高地マヤと低地マ

ヤではかなり異なる。他動詞文でその違いを示すと、表3のようになる。主語、目的語、動詞をそれぞれ大文字のS、O、Vとして、文核内、すなわちV内での主語、目的語、動詞を小文字のs、o、vとする。(表3)

マヤ諸語の語順は圧倒的にVOSである。この語順は世界的にみて珍しい語順である。VS Oとなるのは、マム語の周辺の言語だけで、おそらくこれは言語変化によるものと思われる。文核内の語順はかなり変化がみられる。しかし、三人称単数の目的語の人称接辞はなにもいする必要がない。すなわち、名詞で表わす場合は、名詞だけで、代名詞で繰り返す必要がない。その場合は、上の式のoがなくなるので、全部「s v」となり、共通となる。

その他の語順はどうかというと、たとえば名詞と修飾関係になる語の語順をとりあげると、次のようになる。例文はユカテク語を用いた。

前置詞—名詞 *ti: sun* 「繩で」

前置詞にはこのような独立した形で現われるものと、所有接辞(語)が義務的につく関係名詞と呼ばれるものがある。

y-iknal Pedro 「ペドロ」

iknalは関係名詞で、yは三人称所有接辞である。yはペドロを受けている。先の例のti:の場合でも所有人称がついて、*tinmen* 「私によって」、*tamen* 「君によって」、*tunen* 「彼(それ)によって、そのために」のように使われる。

形容詞—名詞 sak nok' 「白く服」

所有詞—名詞 a suku'un 「君の兄」

名詞<sub>1</sub>—名詞<sub>2</sub> u p'ook-il huan 「フアンの帽子」

u は三人称所有接辞であり、フアンと呼応している。i は所有化の接尾辞である。このように「名詞<sub>2</sub>の名詞<sub>1</sub>」となるが、必ず名詞<sub>2</sub>に呼応する所有人称が名詞<sub>1</sub>につく。さき文核のところでも見たのと同じように、二重に表わされている。

限定詞—名詞 le wink-a' 「この男」

ユカテク語の場合、近称か遠称かは名詞のあとに i-a' または i-o' i-e' で区別される。

le pek'-o' 「その犬」

le pek'-e' 「あの犬(場面にいない場合)」

数詞—名詞 hun-tul wink 「一人の男」

i は人につく助数詞(数分類詞)であり、これは日本語とよく似ている。ユカテク語の場合には、数詞のあとに助数詞がつき、名詞がそのあとに生起する。

マヤの数体系は、二十進法といふことができるが、低地マヤと高地マヤではその形成法が異なる。その違いを古典ユカテク語とツトウヒル語で示してみよう。(表4)

二つを比べるとわかるように、10までほぼ同じ語彙である。違いはあるが、それは、ユカテク語の k や n がツトウヒル語 q と j に対応しているように、同源の語彙が変化したためである。

第二章 過去への糸口

	ユカテク語	ツトゥヒル語
1	hun	ju:n
2	ka	ka'i'
3	ox	oxi'
4	kan	kaji'
5	ho	jo'o:'
6	wak	wa:qi:'
7	wuk	wuqu:'
8	waxak	wajxaqi:'
9	bolon	beleje:'
10	lahun	laju:j
11	buluk	ju-laju:j
12	lahka	kab-laju:j
13	ox-lahun	ox-laju:j
14	kan-lahun	kaj-laju:j
15	ho-lahun	jo'-laju:j
16	wak-lahun	waq-laju:j
17	wuk-lahun	wuq-laju:j
18	waxak-lahun	wajxaq-laju:j
19	bolon-lahun	belej-laju:j
20	hun-k'al	ju-winaq
21	hun-tu-k'al	ju-winaq-ju:n
22	ka-tu-k'al	ju-winaq-ka'i'
30	lahu-ka-k'al	ju-winaq-laju:j
31	buluk-tu-k'al	ju-winaq-ju'-laju:j
40	ka-k'al	ka'-winaq
41	hun-tu-y-ox-k'al	ka'-winaq-ju:n

(j = [x], x = [š])

表4 ユカテク語とツトゥヒル語の数字の比較

ところが、11と12では、両者は異なる形成法である。ユカテク語では特別な形であるのに対し、ツトゥヒル語では、1+10、2+10のように、十進法的な数え方をする。13以降19までは、両者とも3+10、4+10のような同じ形成法である。

11、12における形成法の違いは興味深い。マヤ文字資料のなかに、数字は数多く生起するが、数字の文字は、ふつう点と棒で表わす方法と、頭文字で表わす方法がある。点と棒で表わす方法であると、点は1、棒は5を表わすので、11は一つの点に二本の棒で表わされる。これに対して、頭文字で表わされた数字をみると、11と12は特別な形をしているのに対し、13以降は、顎が骨になった10の特徴に、3、4などの特徴が結びついてできている。このことから、マヤ文字の言語は、高地マヤではなく、低地マヤの言語であったと推測できるのである。

13以降は低地マヤ、高地マヤとも同じ形成法であるが、20以降は著しく異なる。ユカテク語では、21は40にむかって1、22は40にむかって2のごとく数えるのに対し、ツトゥヒル語では、20+1、20+2という形成法であり、低地マヤと高地マヤは大きく異なる。前者を上位起算法、後者を下位起算法と呼ぶことにすると、前章でみた八アハウ・カトゥンなどの数え方は、上位起算的な呼び方であり、数字の体系と暦の体系に同じようなものの方があつたことがわかるであろう。

類型論の話から横道にそれて数字の話になったが、類型論的にいうと、マヤ諸語は、前置詞言語の動詞前置言語といふことができ、また修飾語が被修飾語のまえにくる言語といふことが

第二章 過去への糸口

x-at-in-sak' (根他動詞)	「私は君を叩いた」	平叙文
x-at-in-ch'iila (派生他動詞)	「私は君を叱った」	平叙文
x-at-sak'-e' (in-baan)	「君は(私に)叩かれた」	受身文
x-at-ch'iila-ak (in baan)	「君は(私に)叱られた」	受身文
x-at-bis-ok	「君は計った」	逆受身文
x-in-ch'iila-n	「私は叱られた」	逆受身文
x-at-yok'-ok si'	「君はたき木を切った」	合体逆受身文

(目的語になるsi'は非限定の名詞に限られる。動詞との結合が強いところから合体逆受身文という)

laa'at x-at-sak'-ok w-e	「君が私を叱った」	焦点逆受身文
-------------------------	-----------	--------

「私を」に当たる部分は斜格w-eで表わされている。laa'atは独立人称の「君」。

ani x-sak'-ok aw-e	「だれか君を叩いた」	焦点逆受身文
--------------------	------------	--------

「君を」に当たる部分は斜格aw-eで表わされている。

li winq li x-kamsi-n r-e...	「彼を殺したその人は…」	焦点逆受身文
-----------------------------	--------------	--------

「彼を」に当たる部分は斜格r-eで表わされている。liは限定詞。

表5 逆受身文の例

できる。例外は名詞が二つある場合のいわゆる属格関係の場合であり、その場合はうしろの名詞が前の名詞を修飾する。

マヤ諸語の特徴としては、ほかにいくつか挙げることもできる。たとえば、マヤ諸語は能格言語といえることもできる。能格言語とは、自動詞の主語と他動詞の目的語が同じ取り扱いを受ける言語をいう。この種の言語は、オーストラリアやチベット、コーカサスなど、世界的にみられ、そんなに珍しいものとは言えないかもしれないが、我々にとっては、理解し難い一面をもっている。たとえば、能格言語の特徴の一つに、逆受身形といわれるものがあるが、これなど、頭がこんがらかりそうである。受身形は、能動態の目的語を主語にする場合に行ける文をいうが、逆受身形は、能動態の主語の役目をそのままに、動詞を自動詞化する。受身とちよう

A人称	B人称前置形		B人称後置形			
	単数	複数	単数	複数		
一人称	in-/w-	qa-/q-	一人称 in-	o-	-in	-o
二人称	aa-/aaw-	ee-/eet-	二人称 at-	ex-	-at	-ex
三人称	x-/r-	x-/r...eb	三人称 #-	e(b)-	-#	-eb
in-tz'i:	「私の犬」					
r-iitz'in	「彼の弟(妹)」					
x-at-be	「君は行った」					
x-at-x-boq	「彼は君を呼んだ」					
x-in-aa-boq	「君は私を呼んだ」					
ixq-at	「あなたは女性です」(ケクチ語)					

表6 ケクチ語の人称標識と例文

ど逆のような手続きとなることから、逆受身形という変な名がついたものである。ケクチ語の例から拾ってみよう。例文であげた子音終わりの単音節の根他動詞と、母音終わりの多音節の派生他動詞では、後につく接尾辞に違いがみられる。

マヤ諸語では、自動詞の主語を表わす接辞と他動詞の目的語を表わす接辞が同じで、他動詞の主語を表わす接辞と所有を表わす接辞が同じになる。人称接辞において能格性がみられるのである。マヤ語学では、後者をA人称接辞(能格)、前者をB人称接辞(絶対格)と呼んでいる。この例に倣ってケクチ語でそれを示すと、表6のようになる。なお所有人称は、それがつく語が子音ではじまるか母音ではじまるかで、違った形(形態素)をとる。／の前にある形は、子音初頭幹、／のあとにある形は母音初頭幹につ

## 第二章 過去への糸口

### 他動詞

[ユカテク語]	t-in kiims-ik-ech	「私は君を殺す」(不完全相)
	t-in kiims-ah-ech	「私は君を殺した」(完全相)
[キチエ語]	k-at-in-tzuku-uj	「私は君を探す」(不完全相)
	x-at-ki-loq'o-oj	「彼らは君を愛した」(完全相)

### 自動詞

[ユカテク語]	tan in em-el	「私は降りつつある」(不完全相)
	tan in em-el kachi	「私は降りつつあった」(不完全相過去)
	em-en	「私は降りた」(完全相)
[チョル語]	chinkol k mahl-el	「私は行く、行きつつある」(不完全相)
	ti mahl-iy-on	「私は行った」(完全相)
[キチエ語]	k-in biin-ik	「私は歩く」(不完全相)
	x-ee kam-ik	「彼らは死んだ」(完全相)

表7 完全相と不完全相の例文

く。B人称は、ケクチ語の場合は前置形と後置形があるが、前置形だけの言語(たとえばキチエ語)や後置形だけの言語(たとえばユカテク語)もある。

マヤ諸語は、動作が終わったか、まだ終わっていないかに重きを置く言語であるので、時制ではなく、相を表わす言語といえることができる。前者を完全相、後者を不完全相ということにする。その区別をする形態素は、言語により、かなり違いをみせる。たとえば、ユカテク語の他動詞の場合だと、 $\text{---} \backslash \text{---}$  という違いになつてあらわれるが、高地マヤのキチエ語の場合だと、 $\text{---} \backslash \text{---}$  という接頭辞で表わされる。自動詞の場合は、ユカテク・グループやチョル・グループでは、人称接辞の違いとなる。完全相の場合はB接辞、不完全相の場合はA接辞をとる。これを分裂能格というが、この場合、相の

違いによって、それが起る言語とということが出来る。高地マヤ諸語は能格言語であり、自動詞の主語となるのはB接辞だけである。こういうところにも、低地と高地の違いがみられる。

マヤの言語学はあまり紹介されることがないが、考古学と同じように、過去の文化を再構成できる分野の一つである。言語の分布だけでも、いろいろマヤ文明の理解に役立つことが推定できるのであるが、比較言語学の成果を利用して、まだ十分とは言えないものの、いつごろどんな言語が話されていたか再構成できるし、また言語の変化をたよりに、歴史の再構成に少なからず貢献できるのである。たとえば、『ポポル・ウフ』には、キチエ族らがグアテマラ高地にやって来たときには、すでに先住民がいたことが記されている。高地諸語の違いをみると、その人たちは、キチエ族らの高地東グループとは異なる型をもっていたマム族のような人々ではなかったかと推定できる。彼らがグアテマラ高地にやって来たのは、最近の研究では十三世紀頃で、メキシコ湾岸のタバスコ州あたりからと推定されている。そのあたりにはナワ族の一派がいたとされているが、その人たちはナワトル人ではなく、*tl*が*t*に替わったナワット人であったことが、現在の方言の研究からばかりでなく、キチエ・マヤ人やユカテク・マヤ人が借用した語彙からわかる。たとえば有名なケツアルコアトルは、ケツアルクアトと記されている。そうすると、ランダはケツアルコアトルがイツァ族より以前に来たのか、その後であったか、あるいは一緒に来たのかはわからないとしているが、そうした伝承の解明にも手掛かりが得られるのである。

それぞれの言語の構造とマヤ文字の構造との比較から、その言語を話す部族の、マヤ文明における貢献の度合いを知ることがもできる。たとえば、数字の構成法や語順などから、低地言語は、高地言語にくらべて貢献度が高い。高地言語のなかでも、イシル語は、文核内で、低地マヤ諸語と同じような構造をとるので、特に注意しなければならぬ、などの知見が得られるのである。そうすると、たとえばイシル族の伝えるものは、他より考慮しなければならぬという目安がつく。